図版付き
完全版

日本精神の源流

縄文土器で読み解く

DIRECT
PUBLISHING

はじめに
縄文文化の美

皆さん、こんにちは。

今日は日本の視覚的な、つまり目で見えるいろいろな遺跡や遺物というか、長い歴史の中で必ず形というものが残るのです。これは皆さんが世界旅行をして、いろいろな目で見てくるものがみんな形です。

ですからほかの国に行って、言葉は分からないけれども形で見ることによって初めてその国の文化というもの、あるいは国の歴史というものがある程度分かるということです。そういう形を読むということが、歴史にとっても非常に重要なのです。

私の専門は美術史というものをやっていまして、世界を歩いて行くと必ず美、あるいは美術というものが形でもって表現されているのです。そういうことに注目する学問なのです。

ですから美術史をやり始めてから、私は京都や奈良など日本中を回ったし、それから世界中を回って、一応フランス、イタリア、ドイツに留学しましたから、ヨーロッパのほとんどのものを見ています。

特にフランスなどはフランス政府給費生でしたから、当時非常に待遇が良くて、旅の費用まで国が出してくれまして、大変ありがたかったのです。

また、イタリアでも政府の給費生だったものですから、そういういろいろな遺跡をほとんどただで見せてもらうという特権を得たりしました。

非常にそういう意味では美術史をやるということはまさにあらゆるものを見ることができる1つの大きな特権であるとともに、それが学問になるということになります。

それをやりながら東大の美術史に入って、５０年以上になるわけです。そういうことで、そのような成果を皆さんにいろいろご紹介しながらお話しするわけです。

今まで日本のことを語るうえで、縄文とかあるいは弥生とか、要するに古代といわれるところをなかなか美しいものとして見る、それが1つの文化の産物としてみるというよりも、考古学という単なるその時のいろいろな意味での遺物というか、残されたものの1つとして見るということの方が何となく皆さん慣れていると思うのです。

ところが、実を言うと日本は美しいものを作るということを考古学からやっているのです。考古学的なものの中にたくさん見いだせるのです。そういうことを今日少しお話ししたいと思うのです。

私は歴史を語るとともに、美を皆さんにお見せするという視覚的なご案内、つまりこういう講義となると、目で見る喜びというか、そういうものがあるとないので随分違うのです。

これまではただお話だけするということは、皆さんが退屈するだろうし、場合によっては眠ってしまうということもあるのです。ところが、いろいろなものが目で見えると、やはりそこにある種の目で見る喜びがあるのです。

何しろ五感の中で一番視覚が豊かであるし、一番直截（ちょくさい）でもあるし、一番発達していると言ってもいいわけです。だから視覚的なものというのは、今までは「歴史というと文献だ。いろいろな書いたものが残されていることで分かるんだ」と思っている方が多いと思うのです。

そうすると、これからお話しする縄文、弥生時代、あるいは古い時代、まだ文字が来ない時代というのは大体日本では7～8世紀ぐらいに文字が使われ始めますから、それ以前のことがないということになってしまうのです。

そういうことを無視してしまうわけです。「文献だけが歴史だ」という歴史家がよくいるのです。ですから、「文献がない所は何もなくていいんだ。何も意味がないんだ」ということです。ところがとんでもないのです。

ピラミッドなどというのは、ほとんど文献はギリシャのものしかないので、ピラミッドは依然として謎だということで、今やっといろいろな意味で調査をし始めましたけれども、あのピラミッドの意味というのが分かるのは、ここ２０世紀～２１世紀になってからです。

縄文時代もまさに今になって、私のような美術史という観点でやるようになって、意味が分かってくるということなのです。

この前は「日本が太陽の昇る国だということで、それで人々がやって来たんだ」ということをお話

ししたわけです。

そして、日本にそのころすでに人々が国を造っていた、あるいは現代的な国と言わなくても領土、つまり1つの島国の中のまとまったある種の連絡組織があって、そこでおそらく共に生きてきたのです。そうでないと、言葉が共通になるはずないのです。

それから同じような太陽信仰ですから、今も**天照大御神（あまてらすおおみかみ）**の信仰です。今皆さんは国旗を掲げると太陽、つまり日の丸があるわけです。今「日の丸だという図案だ」と思っている人が多いのですけれども、あれは太陽なのです。太陽信仰の印なのです。

【天照大御神】神々の住む高天原（たかまがはら）を治める太陽の神。天皇家の氏神。

アマテラスを表しているわけですから、まさ信仰のある意味での旗なのです。だから今もスポーツで日本の応援をするために、日の丸を振り回している人がいるのですけれども、あれは1つの単なる国の印だと思っている人が多いのですがそうではないのです。あれは信仰の印なのです。

あのようなものは、7世紀～8世紀ごろにすでに原型があるのです。それから15～16世紀のキリシタンと共に、日本の**支倉使節**などがローマにまで行っているわけです。ヨーロッパに行っているのです。

ご存知だと思いますけれども、支倉使節というのは17世紀の初め、1613年～1615年にかけて旅をして、ローマに行っているのです。その人たちの持っている証書に、きちんと日の丸があるのです。ですから、やはり日の丸は日本の印であると同時に、日本が太陽の昇る国であるということを西洋の人々に知らしめているわけです。

日本の起源は日高見国にあった

この前もお話ししましたけれども、いずれにしてもこれはもう明らかに日本が太陽の昇る国だということであるわけです。ですから、**縄文時代の90数%は人口的に関東や東北に多かった**わけです。

今でさえも**三内丸山遺跡（さんないまるやまいせき）**など、いろいろな遺跡が関東、東北に出てくるわけです。関西、九州には非常に少ないのです。あっても少ないのです。

支倉使節（慶長遣欧使節）
仙台藩初代藩主の伊達政宗は慶長18年（1613年）、仙台藩とスペインとの貿易交渉のため、スペイン国王フェリペ3世、ローマ教皇パウロ5世のもとへ仙台藩士、支倉常長（画）を派遣した。

ですから「日本が関東や東北こそがもとの国だった」ということで、ここにあります**『日本の起源は日高見国にあった　縄文・弥生時代の歴史的復元』**という本にそのこともしっかりと書きました。

これはどういうことかと言うと、日高見国（ひだかみこく）という名前がきちんと日本の神道、祝詞に「日本は大倭日高見国（おおやまとひだかみこく）だ」という言葉がはっきり出てきて、今までは日高見国（ひだかみこく）が何だか分からなかったのです。

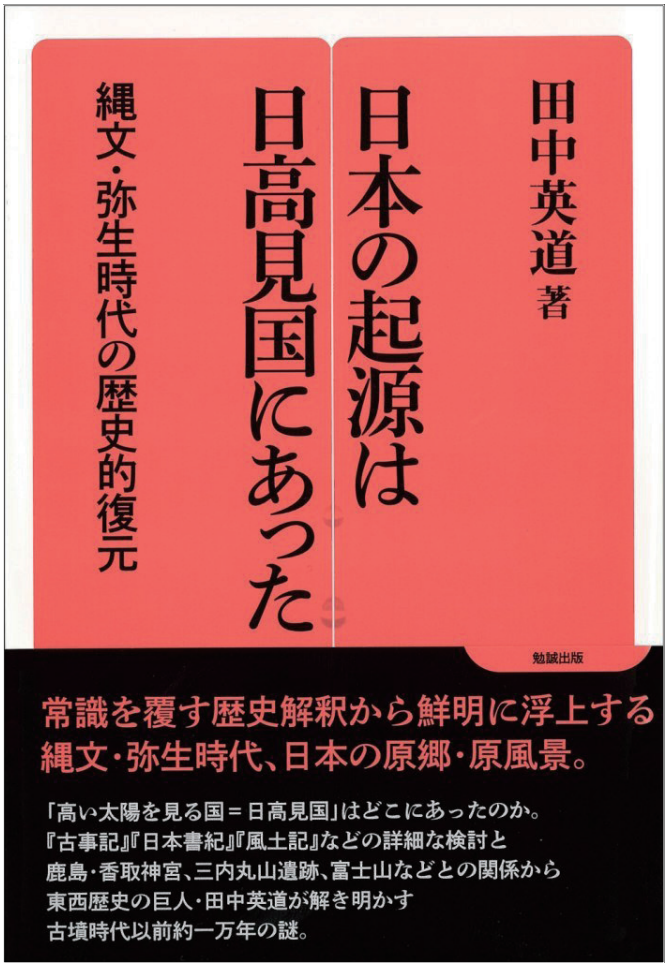
しかし私が解いて、記紀（きき）、つまり『日本書紀』や『古事記』も日高見国（ひだかみこく）の名前が出てくるのです。

それを今まで読み解けなかったのですけれども、「それがちょうど東に当たるのだ」ということをお話しして、発見してここにも書いたのですけれども、

三内丸山遺跡（青森県青森市）　写真提供:三内丸山遺跡センター

三内丸山遺跡は、今から約5900年前～ 4200年前の縄文時代の集落跡。
竪穴建物跡、大型竪穴建物跡、大人の墓、子どもの墓、掘立柱建物跡、大型掘立柱建物跡などが見つかり、集落全体の様子や当時の自然環境などが明らかになっている。
膨大な量の縄文土器、石器、土偶、木器他の地域から運ばれたヒスイや黒曜石なども出土。ヒョウタン、ゴボウ、マメなどの栽培植物が出土し、DNA分析によりクリの栽培が明らかになるなど、数多くの発見が縄文文化のイメージを大きく変えた貴重な遺跡である。

結局そういうことが今まで分からなかったのは、はっきり言って歴史家の怠惰です。



『日本の起源は日高見国にあった』（勉誠出版 刊、田中英道 著）

つまり、戦後の歴史家というのは、全部マルクス主義というイデオロギーに染まってしまって、柔軟な先史を見られなくなってしまったのです。

いまだにそういう人たちが多いのですけれども、今度のこういう新しい世界になってきて、そういうことをもう1回イデオロギーから解放された見方で世界を見なければいけないと私は思っているわけです。そういうことが、日本の縄文時代が非常に重要だということにもなってくるわけです。

ここに日高見国（ひだかみこく）の**縄文文化が開花したという地図（「縄文遺跡分布密度」と「縄文各期の地域別人口」図）**があるのですけれども、地図を見ると遺跡の数が赤く出ているのですが、ほとんど中部から東北にかけて、あるいは北海道の南にかけて圧倒的に縄文遺跡があるのは完全に関東、東北、北海道なのです。

それをここにお見せしているのですけれども、縄文の早期が関東、縄文の前期が関東からだんだん東北にいく、そして縄文中期に至ってはほとんど関東中部そして東北、それから縄文後期は紀元前２０００年頃ですけれども、この辺りは東北にまで広く及んでいるわけです。特に縄文中期というのは、完全に東北と特に関東です。

ですから、ここにある**『高天原（たかまがはら）**

「縄文遺跡分布密度」と「縄文各期の地域別人口」

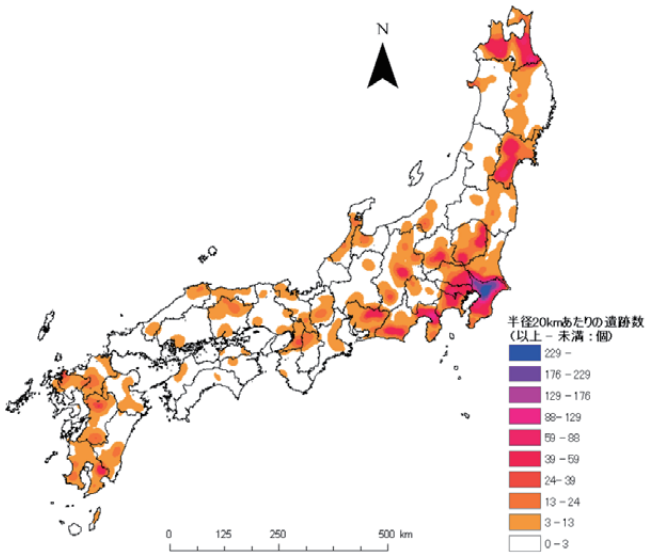


図7　縄文遺跡分布のカーネル密度による面的表現

※『縄文遺跡の立地性向』枝村俊郎(元神戸大学工学部教授)、熊谷樹一郎(摂南大学理工学部教授)より

地方	縄文					弥生	土師(はじ:奈良・平安)
	早期	前期	中期	後期	晩期		
東北	2,000	19,200	46,700	43,800	39,500	33,400	288,600
関東	9,700	42,800	95,400	51,600	7,700	99,000	943,300
北陸	400	4,200	24,600	15,700	5,100	20,700	491,800
中部	3,000	25,300	71,900	22,000	6,000	84,200	289,700
東海	2,200	5,000	13,200	7,600	6,600	55,300	298,700
東日本	17,300	96,500	251,800	140,700	64,900	292,600	2,312,100
近畿	300	1,700	2,800	4,400	2,100	108,300	1,217,300
中国	400	1,300	1,200	2,400	2,000	58,800	839,400
四国	200	400	200	2,700	500	30,100	320,600
九州	1,900	5,600	5,300	10,100	6,300	105,100	710,400
西日本	2,800	9,000	9,500	19,600	10,900	302,300	3,087,700
全国	20,100	105,500	261,300	160,300	75,800	594,900	5,399,800

※縄文各期の地域別人口(『本当はすごい!東京の歴史』(ビジネス社刊、田中英道著)29頁を元に作成。

は関東にあった　日本神話と考古学を再考する』という本を書いたのはどういうことかというと、神話に表された高天原（たかまがはら）というのは、実を言うと**鹿島神宮の近くに3つも高天原（たかまがはら）という土地がある**のです。

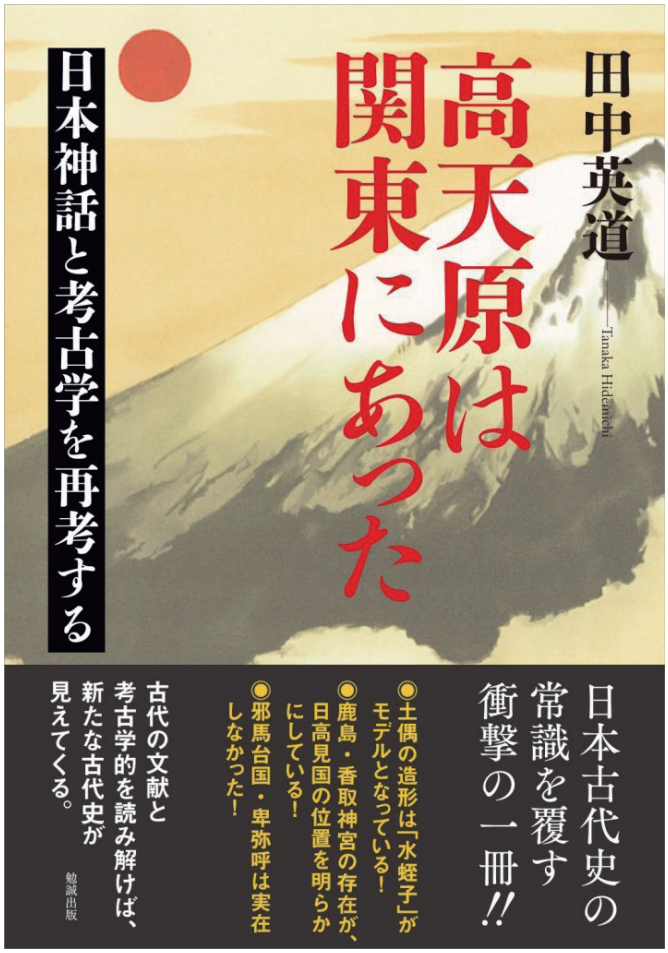
それは地元の人も「これは何で高天原（たかまがはら）という土地なんだ」というのはよく分かってないようなのですけれども、あれはまさに神話の高天原（たかまがはら）があそこにあったということなのです。

ですから面白いでしょう。**高天原（たかまがはら）**というのは、天国のような高い所にあるかと思っている方も多いのですけれども、あれは特に『古事記』で創られた1つのフィクションなのです。

【高天原】『日本書紀』『古事記』などに記された神々の住む世界。天照大御神の孫代である瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）が高天原から九州の高千穂に天孫降臨し、曾孫代にあたる神武天皇が初代天皇となった。

それで皆さん非常に神秘的に、「日本にも天国があったか」ということで、「高天原（たかまがはら）のことは完全にうそだ。神話だ」ということになっているのですけれども、そうではないのです。

結局関西、あるいは中国、四国が大和地方とすると、こちらに**日高見国(ひだかみこく)がずっとあった**ということで、やはり国があったのです。



『高天原は関東にあった』(勉誠出版 刊、田中英道 著)

そのことは前にお話ししましたけれども、そこが縄文の時代にぴったり合ったわけなのです。縄文時代の人々が高天原（たかまがはら）の神々だっ

鹿島神宮（茨城県鹿嶋市）　写真提供:鹿島神宮

初代神武天皇の御代、紀元前660年に創建された神社。日本建国の軍神、建御雷神（たけみかずちのかみ）を祀る。平安時代中期（927年）に編纂された格式「延喜式」の「延喜式神名帳」（全国の神社総覧）では、伊勢神宮、鹿島神宮、香取神宮のみが神宮と表記され（三大神宮）、建御雷神とともに国譲りを成し遂げた経津主神を祀る香取神宮は利根川を挟んだ香取市にある。

▼拝殿

水上の一之鳥居

たということなのです。

これは私だけではなくて、**新井白石（あらい・はくせき）**という江戸の学者もそういうことも言っているのです。これほどはっきりは言っていませんけれども、それで大体分かるのです。

【新井白石（あらい・はくせき、1657-1725）】江戸中期の朱子学者。歴史、地理、言語、文学など多様な分野に精通した。

そちらで関東、東北の人が九州に行く、そこで鹿島から鹿児島へという動きということがあったということです。そういうことはこの本を読んでいただければいいわけですが、今日はそこで作られたものというものを考えたいと思うのです。

縄文時代の大規模集落

よくご存知だと思いますけれども、**三内丸山遺**

日高見国は鹿島神宮のあたりにあり、日高見国こそ高天原である

「高天原は関東にあった」～日高見国から大和へ

跡（さんないまるやまいせき）というのがありまして、これがちょうど1992年ごろから発掘されてどんどん町が出てきたのです。「町」と言っても「部落」とも言ってもいいです。あるいは「国」と言ってもいいです。

つまり高い塔があって、その高い塔は何かというのは、今まで唯物論者が「単なる高い塔だろう」と言って、ただ柱を立てて組み合わせて物見の塔みたいに建っているだけだから、今の三内丸山遺跡（さんないまるやまいせき）は本当に殺風景なのです。

私はそう思わないのです。あれは塔なのです。塔は何かというと、高い塔であって、これは結局太陽に一番近い所という意味できちんとシンボル

三内丸山遺跡（青森市）　写真提供:三内丸山遺跡センター

三内丸山遺跡（青森県青森市）の大型掘立柱建物跡

写真提供：三内丸山遺跡センター

としてあるわけです。

これは仏教でも五重塔というのがあります。あれもやはり高い仏舎利があるわけですけれども、あれによって高い天というものを昇る意識、考え方を示しているわけで、塔があったに違いないのです。

それから三内丸山遺跡（さんないまるやまいせき）には**大きな集会所**があるのです。そして、集会所が2つもあって周りにはお墓もあるし、もちろん竪穴住居もあるのです。これはもちろん「住んでいる人で大体全部の人口が600人ぐらい」と言っているのですけれども、もっと多いはずなのです。

なぜかというと、そこに出てくる住居跡というのはおそらく3，000人ぐらい住んでいることが可能であったのです。**当時の人口**が10万人ぐらいですから、数万人と言ってもいいぐらいなので、これだけの人口があるということであって、非常に多かったということも言えるわけです。

とにかく人口が少ないから文化がないというのではなくて、やはり人口が少なくてもそれだけ人々が知恵を出して生きているわけで、それだけを共同体として生きる以上は一緒にお祭りをやったり、あるいは人が死ぬとみんなで今のお葬式をやるわけです。

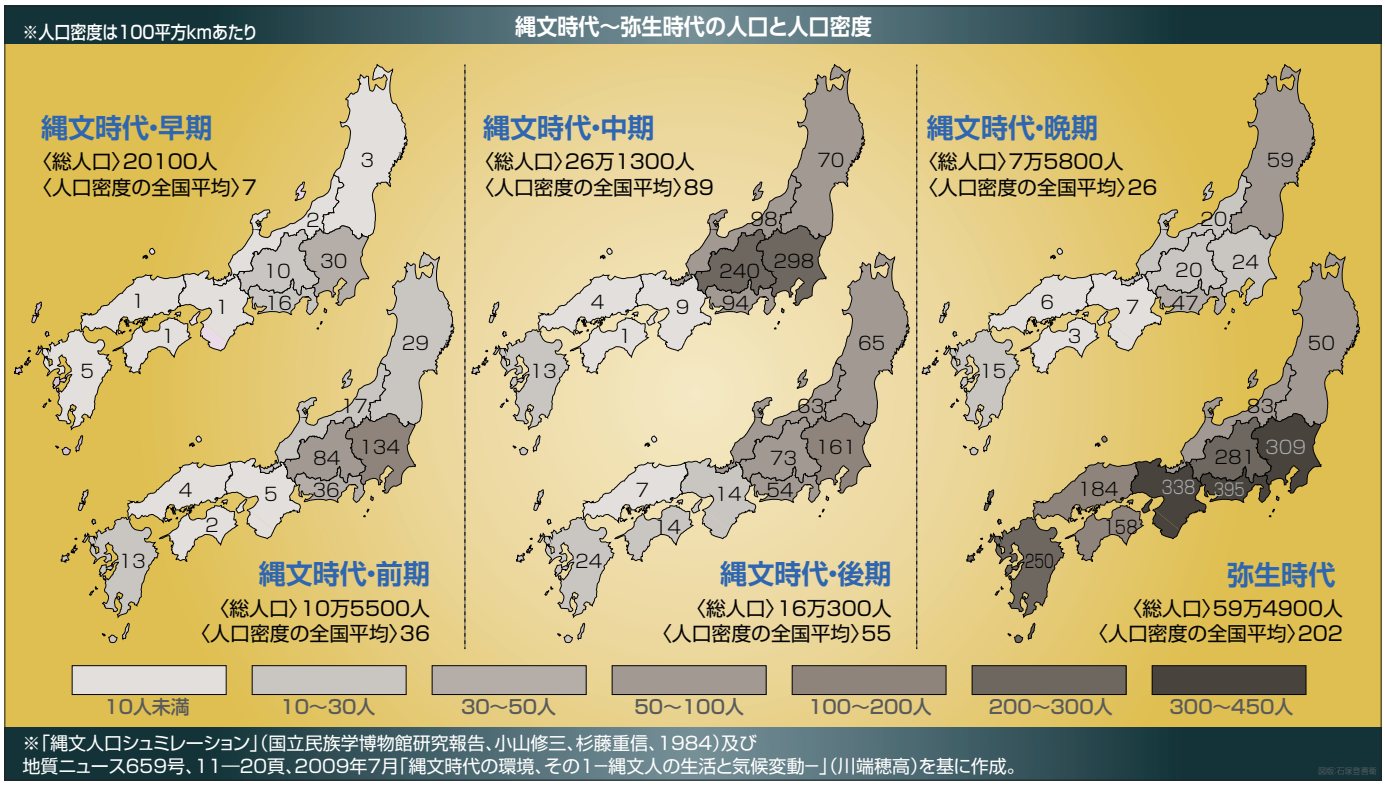
殯（もがり）をやる、あるいはそういう儀式をやるとか、今と同じことをやっていたに違いないのです。そういうことをどういうふうにやってきたかというのが、今どんどん分かりつつあるわけです。

そうしますと、やはり国のようなものと言っても、人というのは必ずしもいなくてもいいのです。

なぜかというと日本の首都というのは、天皇がいらっしゃる所ということで大体動くのです。だか

三内丸山遺跡（青森県青森市）の大型竪穴建物跡（復元）　写真提供:三内丸山遺跡センター

長さが10メートル以上のものを大型住居跡と呼びます。三内丸山遺跡では最大のもので長さ約32メートル、幅約10メートルのものが見つかっています。集落の中央付近から見つかることが多く、集会所、共同作業所、共同住宅などの説があります。（三内丸山遺跡センター公式HPより）



※「縄文人口シュミレーション」(国立民族学博物館研究報告、小山修三、杉藤重信、1984)及び
地質ニュース659号、11—20頁、2009年7月「縄文時代の環境、その1ー縄文人の生活と気候変動ー」(川端穂高)を基に作成。

ら、奈良時代あるいは飛鳥時代でも首都が動くのです。奈良の中のいろいろな所に動くということもあるし、場合によっては琵琶湖の方に移るとか、そういうこともあったわけです。

いずれにしても、そういう近代の国家というものではないにせよ、共同体が大体一緒になって生きるという状態が日本にあったわけです。それこそが、ある意味では国と言ってもいいのです。

この前も言いましたけれども、国家という言葉に「家」というのが付いているのは、縄文時代は竪穴住居が多かったけれども、竪穴住居が各国、全部家族を抱えていて、そしてそこに部落ができた時には大体親戚同士が寄り合って生きるということになるわけです。

日本は幸い狩猟や採取など農耕ではない時代でも、そういうことが定着していたのです。もちろん石器時代は竪穴住居のように土を掘っていました。ご存知だと思うのですけれども、土の中というのは非常に暖かいのです。冬は暖かいし、夏は涼しいのです。これはこういう横穴の岩窟に入るとよく分かるのです。夏は本当に涼しいですよね。

だからそういう土の中に少し掘って家を造るというのは、ある意味では非常に合理的なのです。そこに家族が住んで、そしてそれが部落としては共同体になっていくわけです。

縄文のかたち〜土偶 近親相姦との関係

そこで何を作っていたかということですが、今日お話しするのは当時の作られた形というのは基本的に縄文土器と縄文土偶というものができているわけです。

この2つの意味というのが、今までなかなか解明されてなかったのです。例えば縄文土偶というのは非常に面白い形をしています。縄文のヴィーナスとかさまざまな形をしていますが、特に皆さんよくご存知なのは、青森県の亀ヶ岡遺跡から出てくる**縄文土偶**です。

これは遮光器土偶と言われて、目が大きいのです。どういう目なのだかよく分からないのですが、みんな「宇宙人だ」とか言っていました。私は、これはすべて仮説を超えた1つの定説になると思ってはいるのです。

しかし先ほど「この時代いろいろな家族が竪穴住居で住んで、それが1つの部落になった」ということを言いましたが、実を言うとそこに家族というときは、ある意味で近親相姦という問題があるのです。

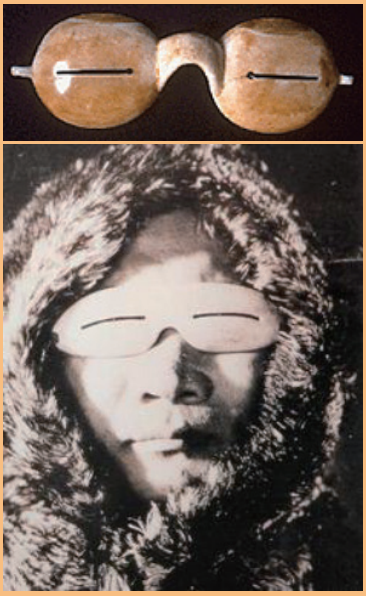
『縄文土偶の意味』～遮光器土偶～

写真:wikimedia

宮城県恵比須田遺跡出土

青森県つがる市亀ヶ岡遺跡出土

エスキモーの遮光器



これは今は完全に常識になっていて、親と子、母と子、父と子、そこには完全に性的な関係はないということは最初から禁止してみんなモラルとしてあるわけですが、昔は兄妹とか姉弟という関係は決してタブーではないのです。

タブーではないというよりも、子孫をつくるということに関しては、そういう性的な関係というのは決して機会がなければそうならざるを得ないところがあるわけです。

今みたいに学校に行ったり、会社があったり、あるいは他の家族、他の知らない人たちと出会うということがあると、「もちろん恋愛というのは他人同士でやるのだ」ということが1つの大きな常識になって、「兄妹と恋愛するなんていうようなことは考えられない」というふうになってはいますけれども、多少猟奇的なこともあるのです。

これが昔でも「そういうものが良くないことだ」ということがはっきりと分かるまでは、かなり時がかかっているわけです。

高天原（たかまがはら）時代は、**伊邪那岐（いざなぎ）と伊邪那美（いざなみ）**がいました。伊邪那岐（いざなぎ）がお兄さんで、伊邪那美（いざなみ）が妹です。この2人が結婚しているのです。

【伊邪那岐と伊邪那美】高天原の神々に命ぜられ、日本（大八州）を産み落とした（国産み）兄妹の神。神武天皇の７代先祖である。

こういうことが神話にあると、「神話だから仕方ないや」ということなのですけれども、実を言うと現実でもあったのです。

文化人類学者から言わせれば、「そういう時代というのは原始状態、あるいは自然状態であって、結局そういうことが危ないことだ、いけないことだとなるということが文化を知っていることになるんだ」ということです。

しかし、こういうことはかなり後でもあるのです。例えばスペインの王朝などを見ていると、王朝の中で近親相姦をやっていますと、結局王様が病気になって早く死んでしまったり、あるいは少し統合失調症みたいな人たちが隔離されてお城にこもっているなど、そういうことがよくあるわけです。もちろんそういう図も書かれているわけです。

要するに原始時代というのは、そういう機会がなかったりするし、あるいは場合によってはそういうことによって家督を継いでいく、家というものを同じ家族がずっと続いていくということは十分にあり得るわけです。そうすると危険度も増してくるわけです。

それで「まさに土偶というのは、そういうことの

『縄文土偶の意味』　～縄文のヴィーナス～

写真提供：茅野市尖石縄文考古館

長野県茅野市棚畑遺跡出土「縄文のヴィーナス」
（茅野市尖石縄文考古館蔵）

・縄文土偶像は当時の近親相姦から生まれる異形人像（異形で生まれた者の偶像化）である。これは日本のみならず諸外国にも見られる現象である。
・いずれも女性像だが、ダウン症や疾患のある眼、痴呆症的な顔、小人や異常肥満など、異形の姿を典型的に示している。
・遮光器土偶の眼は眼病で爛れて両眼が潰れた状態の様子が、何度も模倣されることによって形式化し、眼鏡状に絵画化されたと推測される。
・文化人類学上は、レヴィ・ストロースの言うように、近親相姦の問題は自然と文化の大事な分岐点であり、その存在がひとつの重要性を持っている。
・日本の神話には、それが明確に示されている。イザナギとイザナミの兄妹婚によって最初に生まれた子が蛭子であったことと関連づけて、高天原の時代に神々が近親相姦を行っていたことを予想させる。それによって高天原時代が現実の縄文・弥生時代と関連づけられ、そのことが縄文土偶の表現と対応する。
・この蛭子は打ち捨てられた存在ではなく、それ自体、神となって敬われるのと同様、縄文土偶も神として畏怖され、お守りのように保持されたと思われる。

（『火焔土器は水紋土器である』　第４章）

産物だったんだ」ということは、一見日本の**縄文のヴィーナスやハート型土偶、みみずく土偶**というのを見ていると、「何かそうかな。どうなんだろう」ということで、今までは分からなかったのです。

私は民族史学会で発表して、それから本に書いて、『高天原は関東にあった　日本神話と考古学を再考する』という本にも載せてあるのですけれども、東北大学で教えていた時代に書いたのは「異形なのだ」ということなのです。

そういうものが一番典型的なのは日本ではなくて南米なのです。**南米では「明らかにこの人は認知症だ。あるいは病気だ」とか、そういうことをはっきり出した土偶が多い**のです。

おかしな、本当に目が見えるのか見えていない

縄文土偶の意味～その他の土偶

みみずく土偶
（埼玉県真福寺貝塚出土）

ネコ顔土偶
（山梨県上黒駒遺跡出土）

ハート型土偶
（群馬県郷原遺跡出土）

縄文土偶の意味～世界の土偶

『高天原は関東にあった』
（勉誠出版 刊、田中英道 著）より。

図19　土偶（トラティルコ出土）

図17　女性土偶（メキシコ、トラティルコ出土）

図18　二頭一身の女性土偶（トラティルコ出土）

のか、盲目の顔をして盲目の目のような、あとは顔全体が認知症だということが分かる、そういう図が多いのです。だからわれわれは、「南米は近親相姦が多かったんだ」ということが分かるのです。

場合によっては、アンデスの国などは８世紀ごろ消滅する国があるのです。

「いろいろな疫病などいろいろなことがあった」とは言われるのですけれども、まだ白人たちが植民地にやって来なかった前に、滅亡している国があったりしているのです。

それが何かというと、どう見ても国の中枢が全部近親相姦で病気になったということが考えられるほどのものなのです。ですから、南米にはそういう図がとても多いのです。

いずれここに図をお見せして説明するのですけれども、実を言うとこういうことがかなりいろいろな所で流布していたのです。

例えば、ヴィーナスというと、きれいなギリシャのヴィーナスを思い出す方が多いと思うのですけれども、「**ヴィレンドルフのヴィーナス**」というのはものすごく太っているのです。

これは顔がほとんどないのです。まるでお豆の殻みたいな顔をしているわけです。これはいまだに謎だったのですけれども、分かるのは肥満の異常な子なのです。あるいは女性なのです。

そこが、あたかも子どもを産むという感じでお腹が膨らんでいるということで、異常な肥満体の女性がヴィレンドルフのヴィーナスです。実を言うと、これを見ると明らかに奇形だというのが分かるのです。

「こういうことがずっとこの時代にあったんだ」ということは、忘れてはいけないことなのです。しかし日本は大和になってきて、日高見国（ひだかみこく）時代はあったのです。

つまり**高天原（たかまがはら）という時代**は、今言ったように伊邪那岐（いざなぎ）と伊邪那美（いざなみ）が兄妹婚をするように、それ以後7代はどうも兄妹婚のようです。

ご存知のように天照大御神（あまてらすおおみかみ）と月読命（つくよみのみこと）は姉弟なのです。

須佐之男命（すさのおのみこと）というのも弟なのですけれども、この物語も面白いのですが、ある時須佐之男命(すさのおのみこと)が高天原(たかまがはら）に戻って、誓約（うけひ）といって須佐之男命（すさのおのみこと）と天照大御神（あまてらすおおみかみ）が誓約を結んで子どもを産むというところがあるのです。

『縄文土偶の意味』～世界の土偶～

写真：wikimedia

チェコ・ヴェストニッツェで出土した「土偶のヴィーナス」。約27,000年前のものと推定される。

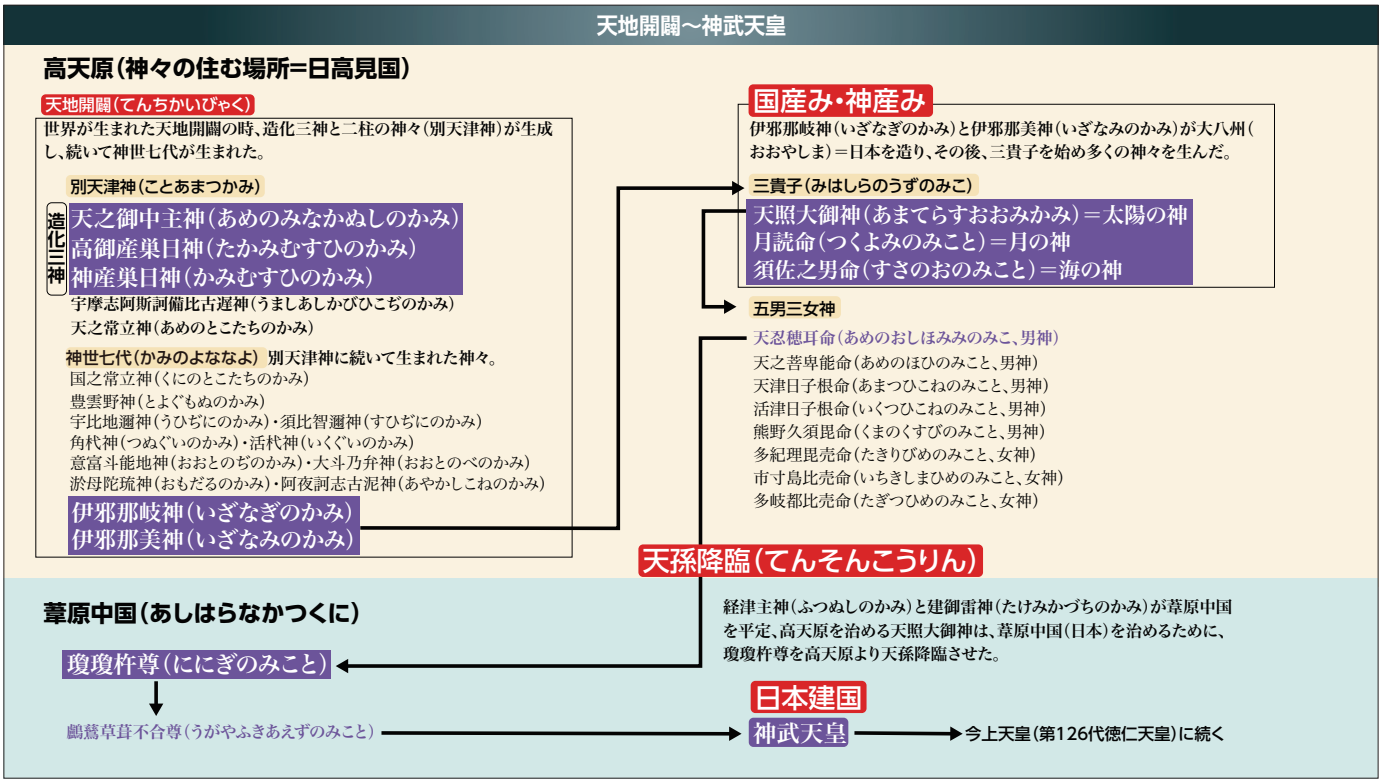
オーストリア・ヴィレンドルフで出土した「ヴィレンドルフのヴィーナス」。約22,000年前のものと推定される。（ウィーン自然史博物館蔵）

これも姉弟婚です。姉と弟なのです。そういう関係が高天原（たかまがはら）の時代にずっとあったということは、実を言うと日高見国（ひだかみこく）時代、つまり縄文時代にあったということなのです。それがこの土偶に表されるわけです。

この土偶というのは、このように（30センチぐらいを手で表しています）小さいものが多いのですけれども、しかし異常にバラエティがあるのです。特に目がむくんでいるようなものは**ダウン症候群**だということです。

【ダウン症候群】新生児に最も多い遺伝子疾患。染色体異常により発生する。身体的発達の遅延、特徴的な顔つき、軽度知的障害が特徴。

私は東北大学時代に、東北大学の眼科医の先生に見せたら「この病気が何だっていうのが完全



三内丸山遺跡出土の土偶。
※写真提供：三内丸山遺跡センター

に分かる」と言うのです。ご存知と思うのですが、特に有名な青森県の亀ヶ岡遺跡から出るこのように目が大きい土偶を「まるでエスキモーの眼鏡だ」みたいなことを言うおかしな説もあったのですけれども、これは目がただれているのです。

こういう例をお見せしますけれども、はっきりと目がただれているのが分かる図から、同じような土偶が作られていると、どんどん形式化していくのです。そしてだんだん美しいものになっていくのです。美しいというか、あたかも大きな眼鏡を付けているような、そういう姿になっていくわけです。その過程も研究したのですけれども、よく分かるのです。

『高天原は関東にあった　日本神話と考古学を再考する』という本にもそういう研究をしたことが、この過程を示しているわけです。これが南米の土偶たちです。本当におかしい格好をしているわけですが、これが今言ったようなヴィレンドルフのヴィーナスです。

これが、今言ったような亀ヶ岡遺跡から出ている日本の遮光器土偶です。そしてさまざまなバラエティがあるわけです。これなどは**三内丸山遺跡（さんないまるやまいせき）から出た像**です。これはしゃがんで手を合わせているものです。おそらくしゃがんで手を合わせているから、ある意味で信仰をしている姿です。

これが今までは全部「宇宙人だ」とか、さっぱり分からないのです。私は美術史をやっていますから、形で関連させてすぐに南米のものとよく似ているし、そういう心性というか、当時の人間の心の在り方というのを探ると、やはり近親相姦というのが非常にはっきりと理由が分かってくるのです。

ですから、こういうふうに今までは「考古学者は考古学だけだ。あるいは美術史だけだ」ということで、そういう視覚的な比較というものをしなかったために、こういうことがよく分からなかったのですけれども、明らかにそういう近親相姦の結果というのが分かってくるわけです。

伊邪那岐（いざなぎ）と伊邪那美（いざなみ）の最初に生まれた子が完全におかしな子だったので、「なぜこういう子が出てくるのだ」ということで、「神が与えた」と言ったら、神も分からないのです。

きっとあれは女性から男性に、「あなたはすてきな人だ」ということで近づいていったからだろうという理由で、「もう1回男から言いなさい」ということでやり直すのです。

それで伊邪那岐（いさなぎ）の方から「あなたは美しい人だ、私のいとおしい人だ」ということで、要するにプロポーズをしたわけです。

それが結局正常な子が次から生まれてくるということになるのですけれども、そんなことで干渉するわけではないのですが、いずれにしてもそういうことで最初は蛭子（ひるこ）が生まれてくるというのも、ある意味で仕方がない状態であったということです。

２番目もそういう子が生まれ、みんな流してしまうということがあるのですが、それが後になってまた神様にもなるわけです。そういうことがちょうど土偶にも表わされているのだというのが私の説であって、それはいずれ定説になると思うのです。

それは形をどう見るかという学問がないと、考

国生みにまつわる、男女の話

高天原の神々は、伊邪那岐（いざなぎ）と伊邪那美（いざなみ）の兄妹に国をつくるよう命じ、伊邪那岐と伊邪那美がまぐわい、大八州（日本）を生んだ。

この時、最初に女神である伊邪那美から「あなにやし、えおとこを」（なんていい男なんでしょう）と伊邪那岐にいった。伊邪那岐は女から先に言ったのはよくなかっただろうかと心配し、果たして生まれたのは手足のない蛭子（ひるこ）と不完全な島だった。

高天原の天つ神（あまつかみ）に相談すると心配のとおりであったことがわかり、今度は男神である伊邪那岐から先に「あなにやし、えおとめを」（なんていい女なのだろうか）といい、再びまぐわうと、次々と立派な島が生まれた。

古学者ではできないのです。あるいは文化人類学者でもこの土偶をどう見るかは分からないです。ですから私は形を見る**フォルモロジー**というのを提唱しているのですけれども、すべて形によって意味が分かってくるということがあります。

【フォルモロジー（形象学）】田中教授が確立した研究手法。形態の比較分析を基本とし、芸術家の造形が成り立つ必然性を文明論に及ぶ広い視点から解き明かす。

それは比較すること、常にさまざまな比較例を出してそれを形象学、フォルモロジーと言っているのですけれども、それによって意味が分かってきます。明らかなもので比較するとかなり似ているので、当然その関連することが意味的に分かってくるわけです。

実を言うとそういう意味で、私も南米に行って「ああ、こういう姿があるのだ、日本の土偶というのと似ているな」と、実は縄文時代の土器が南米にはよく出てくるのです。これはおそらく、縄文時代日本にやって来た人たちが日高見国（ひだかみこく）として栄える、地図でお見せしましたけれどもかなりの人々が関東・東北に来ています。

その人たちが実を言うと、「太陽がまだ向こうにあるのだ」、九十九里浜で東を見て「太陽が昇る所はもっと東にあるのだ」と、昔は地球が球体であることを知らなかったのです。

ですからずーっと平らな所を歩いてきたというのがあるわけで、歩けばすぐ分かりますから、多分知ってはいたと思うのです。ただそれをはっきりと書いたもので認識していなかったのです。

この前、**日本がちょうど北にあって真ん中にエルサレムがある地図**をお見せしましたけれども、あれも球体をしている、あるいは円を描いているわけで、地球は広い円であるという意識はあったのかもしれません。

いずれにしても、そういう所から日本へ行くことを一番の目的としていたということ、これは日本がいかに文明が栄え、文化が盛んだったかということをよく象徴しているのです。

それは何かというと、世界の各国から、あるいはアフリカから出た人はみんないろいろな経路を通って日本にやって来ます。海を通ったり、あるいはオホーツク、シベリアから来たり、もちろん朝鮮を通って来たり、中国から船で来たり、あるいは東南アジアから来たりします。

そういうことで人々はみんなバラエティーのある顔をしていますけれども、その中に特にユダヤ人がいました。ユダヤ人が来たのは実は紀元前10世紀以降ですから、弥生以降なのです。

「太陽の昇る国を目指して」～ヘレフォード図

ヘレフォード図

イギリスのヘレフォード寺院にある中世の世界地図(「ヘレフォード図」)は東が上に描かれている。
今では世界地図は北が上に描かれるが、かつては、東方オリエントの日本が一番上に描かれており、そこには、HEAVEN(天国)と書かれている。ヘレフォード図は、TO図(○の中にT字で表した地図)を基に作られた古地図で、TO図はオリエントが上に、エルサレムが中心に据えられている。
聖書神話にも対応しており、日本が描かれている。エデンの園は聖書の創世記に出てくる東方にある理想郷、楽園、パラダイス。

ヘレフォード大聖堂
(イギリス)

縄文時代の顔はこの前言いましたように、もっと非常に鼻が高くて、割合今みたいな、二次元的というとあれですけれど、扁平（へんぺい）な顔の人は比較的少なかったということが、縄文時代の骨格から分かるわけです。

そういう人たちの中に、もっと鼻の高いセファルディム系のユダヤ人たちがいたに違いないのです。それはなぜかというと、彼らこそが本当にさまよえる人たちだった、あるいはディアスポラ、つまり逃げる、逃散する、散る人たちです。

「散る」というのは彼らもよく言うのですけれども、散ってくる人たちが各地にユダヤ人の部落、ゲットーを作って、弓月国から朝鮮を通過して日本にやって来るのです。ですから朝鮮から日本に来るということは、これまではみんな朝鮮人だと思っていたけれど、そうではないのです。

もっと西方のアジアから来た人たち、これの特に中心的なのがそういう旅が好きで、商人の才能をもったユダヤ人たちだったのです。これがある意味、紀元前１０世紀以降の日本にやって来る人の中心だったわけです。それ以前もいろいろな国から来た人たちで、似たような気質の人たちがいたに違いないです。

いずれにしても、そういう非常にバラエティーのある顔をした土偶がたくさん出てくるわけです。これが各地に出てきまして、それが死んだ子、病気になった子、そしてその思い出として、それをある意味で大事にするのです。

常に死んだ子を今の写真のようなもの、そういうもので鎮魂する、心を静めるわけです。それが土偶だったと私は言っているわけです。これは私が言わなくてもそういう信仰が分かれば、当然そう言わざるを得なくなってくるわけで、この時代が文化人類学的にそういう時代だということはもうはっきりしているのです。

いろいろな形があって、ネコの顔をしているとか、特にハート型土偶というのはハートの顔をしているわけです。しかし目を見ていると明らかにダウン症候群です。それから顔がないのもあるわけです。これはちょっと形式化して何ですけれども、先ほどのヴィレンドルフのビーナスもそうですが、ほとんど顔がないです。

ですから、今のような奇形が少なくなって、そういうことはたまにしか出てこないという状況ですと、こういう奇形の、異形の土偶、バラエティー豊かないろいろな形、いろいろな姿というのがあるのだということを想像がつかなくなっているのです。けれども、それだけ確かに文化度が進んでき

たということの表れだということです。

その中にやはり手を合わせる異形がいるということは、少なくともそういうことをまともな人から習ったという可能性もあるわけで、すでにそういう拝むという自然信仰、御霊信仰というのが神道の重要な信仰体系ですから、それがもうすでにこういう中で表されているということが言えると思うのです。

縄文のかたち～土器
造形美をまとう世界最古の土器

それからもう1つ重要なのは、土器です。この土器は驚くべき土器と言ってもいいのです。中期になるとものすごく凝った形をしているのです。これは画面でお見せしますけれども、この凝った形というのは何かというと、**火焔（かえん）土器**という皆さんもよく言われてご存知と思うのですけれど、これは火焔（かえん）土器ではないのです。

なぜなら土器というのは大体火にくべて、そこに物を入れて熱するわけです。下に火があって燃やすわけで、その火がまたこの土器の形に、同じ意味のものが2つ出てくるというのは少しおかしいです。「そういうこともあり得る」ということが言えるのですけれども、それは結局水なのです。

大体、土器というのはそこに入れるものは基本的に水です。ですから、そこに煮炊きする料理を入れるといっても、どう見ても周りに火炎や水のようなものすごい複雑な模様があると、あるいはそこに造形があると、物などは入れられないのです。

これはもう水以外の物は入らないです。ですからこれは明らかに、水信仰というものが基本的にこれを作らせたと言ってもいいのです。では、なぜこういう形をしているのかということなのです。

ここで中心的なことをお話しします。

縄文土器、あるいは縄文土偶の縄文というのは何かということです。

つまりこの時代のあらゆるものが縄文というもの、ひもの何らかの痕跡を残しています。これは1万6，500年前の、この一番最初の土器と言われるものからそれがあるのです。

皆さんご存知だと思うのですけれども、土器というものが最初に作られたのは日本なのです。それまでは石器ですから、石器というものが基本であって、土器があってもそれは単純な入れ物にすぎなかったのです。

土器というのは相当高い温度で焼かないと、硬いものはできないのです。日本のものは非常に高い温度で土を焼くわけです。普通、ほかの文化やほかの国の土器というのは、大体低い温度で焼くものですから、壊れやすいし、それからあまり模様などもほとんど付いていない無紋の土器が多いわけです。

日本で初めて土器に模様を付けます。当時は模様を付けるというような余計なことはわざわざ必要ないわけです。食べるための機能さえあれば十分ですから、模様を付けるということはないです。

ところが日本の土器は世界で最初に模様を付けています。模様を付けるとは何かというと、これが縄文なのです。縄の模様だったり、ひもだったり、大体そういうものを土器にくっつけていきます。実を言うと、先ほどの土偶もそうなのです。土偶も形を作るときに、全部ひもなのです。

ひも状のもの、あるいは縄状のもので形を作っていきます。だから場合によっては、**目の周りにふちがあるからあたかもダウン症候群のように見えます**けれども、実はそれはひもで描くからそう見えるのだということも考えられるわけです。いずれにしても異形であることは確かなのです。

そのひもというのが日本にとっては非常に重要なのです。これは出雲大社に行くと偉大な注連縄（しめなわ）が神社の前に垂れ下がっているのです。あれは何かというと「そこが結界である。そこの向こうは神のおられる所、霊界なのだ」というところを示す1つの入り口、結界と言ってもいいシンボルなのです。

例えば、大きな老木によく注連縄（しめなわ）が張ってあるわけです。あれも「中は聖なる神様なのだ」ということを言うために**注連縄（しめなわ）**を張るわけです。この縄を張るということ、今でも「私の縄張りだ」などと俗に言うわけです。

自分の持っているそこが「私のテリトリーだ、私の領土だ、私の土地だ」と言うわけですが、それ

新潟県・笹山遺跡出土 火焔型土器（国宝）
写真提供：十日町市博物館

土偶と土器の図像の関連　写真提供：岩手県立博物館

は俗な使い方であって、そこに縄を張るということによって、「そこが聖なるものである。そこが霊的な存在なのだ」そういうことを日本は非常に大事にするわけです。

ですから縄文というものが、単なる縄を張ってあるというだけの即物的なものではなくて、そこに霊的なものがあるのだということを示すための芸術表現なのです。

ですからこれを見ないと、原始的にただ模様を付けただけなどと思ってはいけないのです。戦後の皆さんが習った歴史観というのは即物的な意味で、そういう精神性というのを全部抜いてしまうのです。みんなが、単なる即物的な必要性ということしか人間は考えなくなってしまいました。

出雲大社 神楽殿の大注連縄　写真提供:出雲大社

だから今だったら「お金が必要だ。何かを食べたい。食べ物が必要だ」そういうことでしか人間は動かないのだというふうにして、今の歴史観ができてしまったのです。ですから「そこに霊がいるのだ。そこに神様がいるのだ。そこに閉じなくてはいけない1つの聖なるものがあるのだ」、そういう考え方が、戦後は「原始的だ」とか、「そんなのは観念的だ」とか、批判されてみんなたじろいでしまいました。

全部うそだったのです。近代の今だって分からないです。人間というのはそういうことがないと生きていけないのです。そういう人が死ぬときになって、みんな同じことをやっているのです。「即物的な、そういうことが良いのだ」というのはマルクスだけなのです。**マルクスが唯物論を言った**時、みんな真似してしまいました。

【唯物論とマルクス主義】唯物論は、経済学、唯物史観とともにマルクス主義の根幹を成す。神よりも先に物質があり、神仏は存在しないという考え方。

それは明らかにユダヤ人がそれを宣伝して、それがあたかも普遍的になったのが19世紀、20世紀なのです。しかしそれは単なる1人のユダヤ人の考え方にすぎなかったのです。それは何度も言っていますが、別に私がそういうことではなく真実の問題です。

ですから日本というのは、今だって人々に贈り物をするときには箱を包む、これも1つの包むことですけれども、必ずそこにまたひもで結ぶわけです。これは「中のものがありがたいものですよ、私の気持ちが入っていますよ」という意味なのです。

そういうのを見て皆さん「ありがとう」というくせに、そういうことの意味を忘れてしまうのです。ですから今からそういうことを大事にする、今もそういうことで資本主義で商品が成り立っているのだということを考えなくてはいけないのです。

日本は人にものを差し上げるときは、カッと書いてあるお菓子をそのまま出すよりも、必ず箱で包んだり、ひもで結んだりします。そういうことによって初めて相手に対する敬意も出てくるわけです。中の霊なるもの、つまり私の感謝の気持ちだというのも出てくるわけです。

ですから日本の表現力というのは、まず縄文にあったということをわれわれは考えなくてはいけないのです。そこに人間関係というものがいかに大事かということが出てくるわけです。ひもというのは人々を結ぶわけです。

このごろはやりましたが、今は「絆」とよく言われ、左翼の人はよく絆などと言いますが、それは労働者の連帯などということで使っているのでしょうけれど、そういうことではなくて、人間というのはそれぞれ役割の中で、きちっとお互い同士絆を持って、特に家庭では深い絆を持っているわけです。

血縁という絆があるわけです。それもすべてが糸へんなのです。ですから「縄文」も「絆」も全部糸へんなのです。やはりそこで結ぶということがいかに人々を団結させるか、これが大事なことなのです。団結の「結」も糸へんです。

ですから人の和を作るということ、人を結び留めるということ、これが日本人の基本なのです。ですから「和の精神、和の精神」ということを日本は必ず言うわけです。

これは確かに聖徳太子の十七条憲法が「和をもって貴しとなす」というようなことを言うから、「これが日本の和なのだ」と、でももっと古いのです。

縄文から和があるのです。それはひもで結ぶ、その絆を結ぶ、人々は家庭を全部結んでいかなければいけないのだという道徳観も表しているわけです。

これこそが日本人の本当の姿であるわけです。日本はそういう結ばれた共同体ということと同時に、後で仏教が来ることによって個人というものの在り方をまた学ぶわけですが、これはまだ後の話です。

私は仏教の話をするときに仏教美術を特にこういう形というものを中心にしてお話ししているわけで、優れた形というものに美が生まれてくると、まさに和が美になって、より高い段階になってきます。そういうことが1つの造形性ということにもつながってくるし、芸術という問題にもつながってきます。

それは文化の核です。そういうものがずっと続いていく日本というものが、そしてまたある意味で

そこを極端に言えば、去年今年もずっと天皇陛下が新しい時代を迎えられ、**即位されて一連の儀式**をご覧になっていると分かるでしょう。

非常に美しいです。美しい姿、美しい装束、装束もやはり結ぶ、束になるわけです。そういうことの美しさ、ですから和というものが美の基本になるということもあるわけです。そうするとより高い段階の姿になっていくわけです。これこそが芸術でもあるわけです。

ですから名古屋の**トリエンナーレで天皇のお姿を燃やしたり**するということは、まさにそういうことをいかに忌避している、否定しようとしている人たちがいるということが分かるわけです。

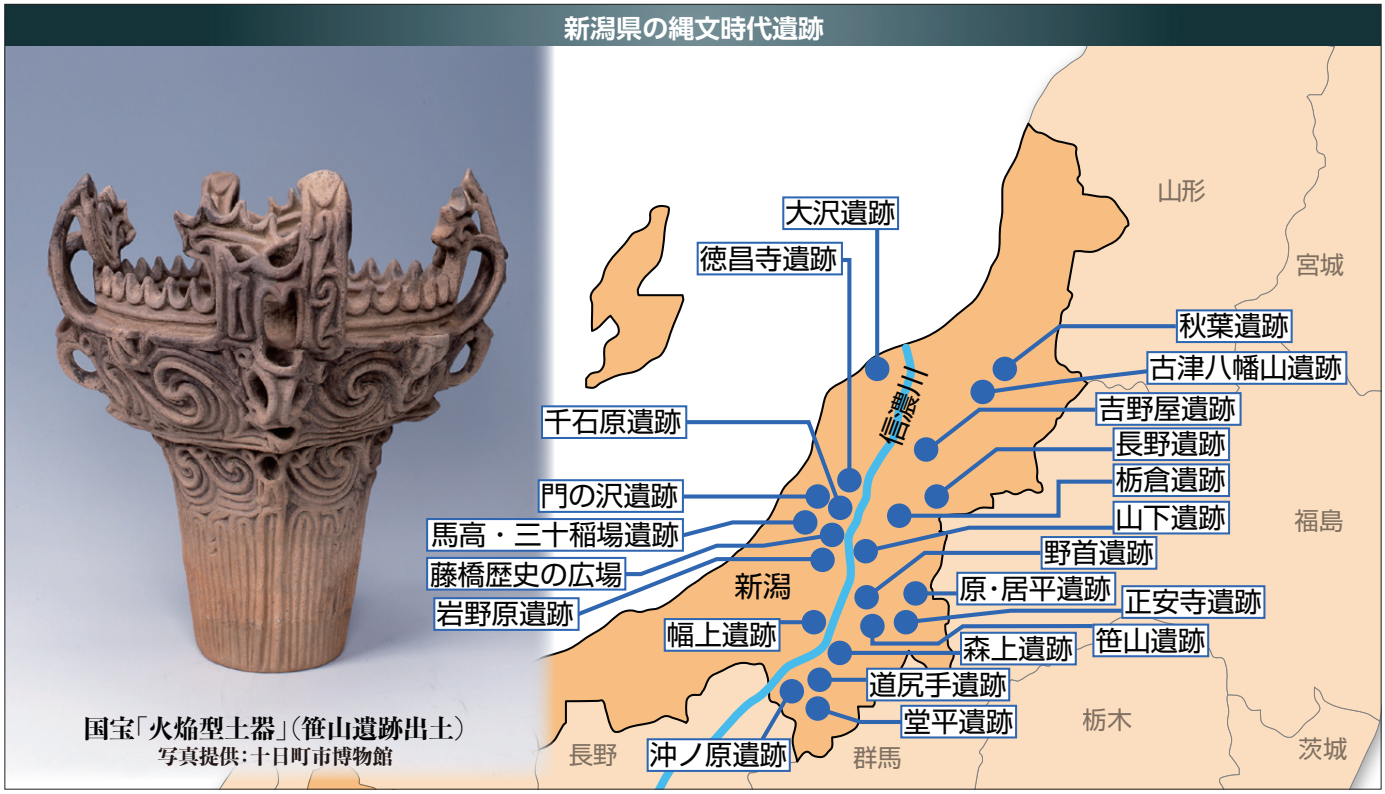
【昭和天皇を侮辱する表現作品】2019年8月1日から愛知芸術文化センターなどで開催された「あいちトリエンナーレ2019」の企画展「表現の不自由展・その後」において、虚偽の「慰安婦問題」をプロパガンダする「慰安婦像」や昭和天皇の肖像写真を燃やして踏みつける表現「遠近を抱えてPart Ⅲ」（大浦信行）の展示に抗議が殺到し、開催3日目で中止となった。

ところがあれは芸術でも何でもないです。芸術だと称してやっているけれど、とんでもないおかしなことです。あれは単なる遊びにすぎないのです。意味がないことです。意味がないこと以上に汚いことです。だからそういうことをやるべきではないわけです。

即位正殿の義は、令和元年（2019年）10月22日、皇居正殿松の間において行われた。（写真は首相官邸HPより）

やはり美しいものに中に普遍性があるわけで、そしてそういうものを保っていくこと、それが1つの絆でもあるわけです。

今度は特に面白いのは、先ほど少し触れましたけれども火焔（かえん）土器というもので、実を言うと**新潟県に多い**のです。これが火焔（かえん）土器と言われているのは、ただ発見者が「火焔（かえん）のようだ」というふうに言っただけであって、あそこには信濃川という長い立派な川があって、そ



の沿岸地方にこれが出てくるのです。

そうすると、あそこは洪水があったりいろいろな川の流れというものがあって、そこで漁業をしたり、魚をとったり、それから水浴びをしたり、あらゆることが川で行われるわけです。それから、そこを船で行ったりするので、洪水があったりすると大変なことになるし、川が干上がることもあるだろうと思います。そういう川を中心とした世界の中でできたのが、要するに今言われている火焔（かえん）土器なのです。

しかし、地元の方々は火焔（かえん）土器と言いますけれども、私たちから言わせれば、あれは水煙土器と言ってもいいし、水紋土器と言ってもいいし、そういうことなのです。

それはなぜかというと、今言ったように川というものの動きの中で生きているからです。**新潟県十日町市の笹山遺跡**から、すさまじいほどの多様な水煙土器が出てきています。 これは、もうそれだけ水を非常によく観察していた人たちが、それをいかにひもで表現するかということを考えたものです。つまり何度も言うように、そのころは筆がなかったのです。

岩窟に彫ったりする仏像などは後で出てきますし、岩窟に文字的なものを彫ったり、模様を彫ったりすることはすでにありますけれども、筆を使ったり、岩石を彫ったり、大理石を彫ったりする技術は日本にあまりなかったのです。

しかし、日本では、磁器とはいかないけれども、それ以前の高温で焼いた強くてしっかりとした硬い土器ができていくわけです。その干した後の硬い土器になる前の柔らかいときに、どんどんひもでもって作っていき、そういういろいろなものを当てていくという技術をもって、この火焔（かえん）土器と言われる水紋土器が作られるわけです。

そして、これまでは縄文土器というと、このたった1つだけの決まったものしか出てこないのです。国立博物館に出てくるものも、確かに火焔（かえん）土器と呼ばれるような典型的な例なのですけれども、たった1つのいつも同じものが出てきています。

しかし、もっとすごいものがあるのです。これを皆さんにぜひ見ていただきたいのです。

今ご覧のこの画面に出てきますけれども、これ（「笹山遺跡出土土器」を指しています）は見事なものなのです。ここだけでも本当にたくさんの例があるわけで、これを見ていると「これは美なのだな」と思います。

積極的にただ模様をつける、あるいは結ぶというだけではなく、そこに「美しいものを作る、積極

笹山遺跡（新潟県）出土土器群　写真提供：十日町市博物館

笹山遺跡出土王冠型土器（国宝）　写真提供：十日町市博物館

的に芸術までいくという段階がもうここにあるのだな」ということが分かるのです。

そして、この前イタリアで文化庁が指揮して仏像展をやってくれたのです。まあ残念ながら一番いいものは行かなかったのですが、それでも世界で初めての日本仏像展をイタリアのローマでやったのです。その後イタリアは「ぜひ何かやってくれ」と言って、特に鎌倉の**運慶**の「運慶展をやってくれ」と言うのです。

ところが文科省に言ったら「運慶なんて外に出すのはとんでもない」みたいなことを言うのです。日本では結構移動しているのに「世界に行くと危険だ」と言って、到底出さないのです。日本にはミケランジェロの企画が来たことがあるのに、運慶を出さないのです。それは今のように作品をきちんと輸送できる技術があれば、行けないことはないのです。

そして、イタリアのようなミケランジェロ、レオナルドの国が、一番見たがっているのは運慶とか公麻呂（きみまろ）なのです。運慶、湛慶、**公麻呂（きみまろ）**です。公麻呂（きみまろ）というのは皆さんご存知ないかもしれません。これはもう大変な傑作を書いている天平時代の作家なのですが、これはいずれお見せします。「そういう人たちを、ぜひ出してくれ」と言ってきているのに、けんもほろろなわけです。

【国中公麻呂（くになか・きみまろ、?-774）】東大寺盧遮那仏の造像、大仏殿建立の指揮をとった。

運慶（うんけい、?-1224）
平安時代末期～鎌倉時代初期に活躍した仏師。写真は現存する最古作とされる円成寺大日如来像。

サン・ピエトロ大聖堂「ピエタ」
ミケランジェロ・ブオナローティ
(1475-1564)

「預言者ハバクク」
ドナテッロ
(1386-1466)

サン・ピエトロ大聖堂「聖ロンギヌス像」
ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ
(1598-1680)

しかし、代が変われば、だんだんそうなっていくと私は思います。それだけ「輸送のテクニックが進めば、全く壊れることはないだろう」、そう考えています。いずれにしても文科省は断ってきたのですが、「その代わりに縄文の土器展をやってくれ」ということだったのです。

そして、私がこれを美術史の先生に全部見せたところ、２人の代表的な学者が、「大統領官邸のクイリナーレ宮という一番素晴らしい宮殿があるので、ぜひそこでやりたい」ということになって、向こうは会場を準備したというのです。

しかし、今度も土器展となると、２０１８年のフランスでの「ジャポニズム展」の時に出たために、なかなか文化庁も「簡単にイタリアにすぐ持ってはいけない」というようなことを言って、また延びそうなのです。

イタリアというところは、やはり造形というものの感覚はフランス以上なのです。ですから、立派な彫刻家がたくさん出ています。**ミケランジェロもドナテッロもベルニーニ**も、超一流の彫刻家がイタリアには出ていて、フランスはいくらかいますけれど、ロダンだけです。イタリアがやはりすごいわけです。

イタリアという国はやはり造形性では中心ですし、ギリシャ、ローマ、イタリアという国の系列こそが、実を言うと西洋の系列の主流なわけです。私はそこに、ユダヤ、キリスト教、イスラム教という、そちらの軸も1つ入れて、それから日本を中心としたアジア、この3つが世界の文化を作っているのだということを言っているわけです。

そして、日本のこの形の文化の最初が、この縄文土器なのです。縄文土偶の方は、どちらかというとあれは鎮魂ですから、美しさをあまり求めてはいないわけです。しかし、これは水の美しさ、水を神秘化する、水というものがいかにすごい神のような複雑な深い動きをしているのかということを表現していると見ざるを得ないのです。

それはここに示しましたけれども、まさに**北斎の波の図（葛飾北斎「富嶽三十六景　神奈川沖浪裏」）**があります。あの一番有名な絵がこの人なのですけれど、北斎の富士山が少し見えて波がかかっていく、あれの感覚です。あれを予想すれば、すぐに縄文土器が分かるわけです。そして、北斎の波の図が、江戸時代からずっと縄文時代までの波のイメージです。

要するに、日本の縄文人たちは、全部日高見国といって、日が高く登るのを見に来ているわけで、それはどこかと言うと海辺なのです。日が海から

葛飾北斎「富嶽三十六景　神奈川沖浪裏」

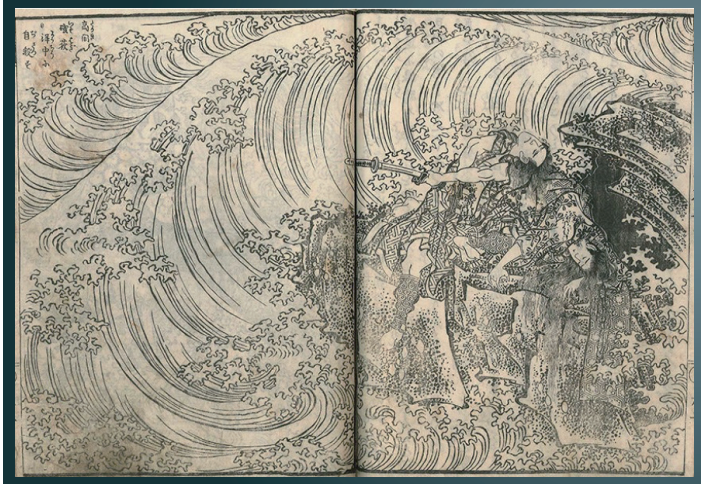
高く登っていくというところを見るのが日高見国であるわけです。それこそが日本の来た目的なのです。そこにこんなに豊かな自然が残り、水がたくさんある、だから水を神様とするのです。

今だってアラブ人たちにとっては水が本当に貴重ですけれども、日本人は水道の水が飲めるぐらいです。簡単にただで水が飲めます。とんでもないですね。たまにはありますけれど、日本以外にはほとんど考えられないです。でも、ご存知のように、もうほとんどみんなボトルの水を飲んでいるわけです。アメリカなんかみんなそうです。

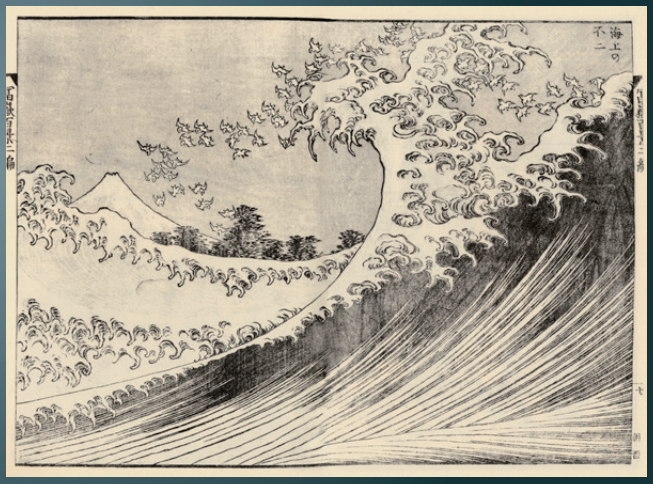
日本では水道の水が飲めるということだけでも、非常に貴重な水資源なのです。中国なんていうのは本当にそれがないものですから、ダムを作って

葛飾北斎などに見る「水」の描写

日本の水流表現では北斎のそれがレオナルドと並んで有名。北斎のような同じ日本の風土に生きた巨匠の水流表現は、縄文時代を生きた人々と同じ観察眼に基づくものであったであろう。
（『火焔土器は水紋土器である』　第７章より）



葛飾北斎「椿説弓張月　高間太郎切腹の場面」



葛飾北斎「富嶽百景　海上の不二」

ネプチューン
ローマ神話のネプトゥーヌス、ギリシャ神話のポセイドン。いずれも海の神。

水を貯めたりして、かえって危なくなって、洪水が起きたりしているわけです。

ですから、水というのはいかに大事かということを縄文から知っていたということなのです。そして、それは複雑な形をしているのです。これもきちんと言っておきますけれども、日本以外では大体、神様というのは擬人化するのです。

水、ウォーターだって擬人になるわけです。水の神様というと「ヴィーナス」もそういうところがあるのですけれど、いろいろな意味で人間の姿をする神が多いわけです。ですから、「ネプチューン」というのは、ある意味で水の神様と言ってもいいと思います。やはり、そういうすべてが人間の姿をしているのです。

ところが日本は、こういう縄文土器のように水そのものを造形化するわけです。**ネプチューン**のような海神などという姿は、人間の姿とすれば堂々としていますから、すぐさまそれが1つの芸術になり得るわけですけれども、日本は水の姿を芸術化するという、これは大変なことなのですが、それを見事にやり遂げているのです。

そして、特に**山梨県の八ヶ岳周辺の縄文土器**というのは、新潟県のこの土器よりもより複雑で、より芸術化していて、より北斎の波の図を思わせるものなのです。

そしてこれも素晴らしいもので、私はレオナルド・

水煙土器など

写真提供：山梨県立考古博物館

山梨県安道寺遺跡出土
（縄文中期）

写真提供：井戸尻考古館

山梨県八ヶ岳周辺出土
（縄文中期）

写真提供：渋川市教育委員会

群馬県渋川市道訓前遺跡出土
「火焔型土器の影響を受けた焼町土器」
（縄文中期）

レオナルド・ダ・ヴィンチに見る「水」の描写

「板によって遮られている水の習作とノート」
写真：Royal Collection Trust

ダ・ヴィンチ、ルネッサンスの研究をしていたのですが、**レオナルド・ダ・ヴィンチも波の図、水の図の専門家でもあるわけで、これはもうすごい**のです。

大洪水が起こって、人間が「審判というのは大洪水が起こることだ」と言って、「ノアの方舟」もそうですけれども、洪水が起こって人間が全部水没するというか、水の中に沈んでしまって世界が全滅するわけです。

ですから、こういう姿をこの画面(「レオナルド・ダ・ヴィンチに見る『水』の描写」)でお見せしますけれども、レオナルドの水のデッサンというのは素晴らしいものを持っているのです。これはもうほとんど北斎の滝の図と水の図に匹敵しています。この水の細かな流れの素晴らしさ、水の動きに美術の天才が全部魅かれるわけです。

それをこの縄文の天才は、その水の動きをひも

レオナルド・ダ・ヴィンチに見る「水」の描写

「馬上の男と樹木を襲うハリケーンと巨大な水の噴出」
写真：Royal Collection Trust

レオナルド・ダ・ヴィンチに見る「水」の描写

細かな水の動きの観察者であったレオナルドは大洪水の図を十数点描いているが、この洪水と暴風雨が重なった動勢が縄文土器の動勢に似ていることは一考を要する。

信濃川は度々氾濫し、土器の制作者も洪水を熟知していたに違いなく、これを自然の神的な仕業として表現したいと考えたに違いない。彼らもレオナルド同様、水の観察者であり、それを図案化する能力を持っていたと思われる。（『火焔土器は水紋土器である』第７章より）

写真：Royal Collection Trust

によって表現しています。ひもというのは当時の彼らにとっては筆ですから、このひもというものが大事だということを、われわれは縄文から分かるわけですけれど、実を言うと計測をすることも、あのころはすべてひもでやっていたのです。

例えば縄文尺というのがやはりひもでやっていましたから、あらゆる単位というもの、計測をするということもひもでやっていたわけです。ですから、別にそれを記録したり、今の数字を使った文字化した数量ではなく、ひもによって大きさを測っていくという、そういうやり方だったのです。ですから、縄文尺というのは、結構正確に測れるのです。

「文字がないから、日本なんか原始的だったろう」ということすぐ言うわけですが、立派なああいう文字がなくても、あれだけ立派な前方後円墳を造り、立派なこういう土器を作り、こういうことができるのは全部ひもというものをまさに縦横無尽に使って、その数的な単位を作っていたわけです。

ところが、ひもというのはもちろん後でどんどん消えてしまいますし、燃やしたらなくなってしまいますから、その証拠がないのです。木はまだ木簡として残りますけれど、この時代がいろいろなものにひもを使っていたという証拠というものが、必ずしも残っていないわけです。

そして、これにはいろんな繊維を使ってやるわけで、麻というのが当時は非常に使われていますし、後になって絹が出てきますが、そういうものを使って糸を作っています。しかし、今度はどうしてもひもを作って、ひもによってあらゆる形を作っていくという、そういうことをやっていくわけです。

ですから、日本人の表現というのは一見、西洋と比べる、あるいは中国と比べると、あまり堅固には見えないのです。しかし、この土器というものを見せるということは、まるで向こうでは装飾的に見えるわけです。

ですから、なぜこれだけの優れた縄文土器があるにもかかわらず、これまでそれが美術展にならなかったかというと、日本人が遠慮してというか、日本人は「それは1つの形に過ぎないんだ。ひもと同じなんだ。ひもを見せるってわけにいかないよ」ということになるのです。

しかしそうではなく「ひもというのは筆なんだ。ひもというものが1つの表現単位なんだ。表現手段なんだ」ということを考えると、ひもでもって作られるものは、普通、機能だけを考えれば単にそのまま土器として作ればいいわけです。

しかし、そこにもう本当に壊れるばかりの装飾を作るということは、まさにそれが芸術、表現と

しての十分な手段だったということが分かるのです。これこそが大事なことで、芸術を作るということは、意外にほかの文明にはないのです。

縄文土器の場合は1つずつ全部違うのです。1つずつ違うということが大事なことなのです。エジプト文明は一見派手に見えますけれど、エジプトの場合は、全部同じ姿で人間が出てきます。

目が正面、顔は真横、足も真横で1つの形ができていて、いろいろなものが出てくるわけですが、日本の縄文土器というのは、もう本当にバラエティがあるわけです。

ところが、残念ながら人間の形をしていないものですから、何かそこに精神がないかに見えるわけです。人間の形をしていれば、そこに精神があると思って見るから芸術になるのです。しかし、土器の場合はただ装飾だけだから、精神がないと思ってしまうわけです。

それはとんでもない間違いで、現代の狭い了見です。特に日本は全部、物そのものに精神が宿っているわけですから、太陽そのものを思わず拝むわけですし、月が出てくるとやはり拝むわけです。

全部、その形態そのものに魂がある、そういうふうに思うわけですから、木を拝む人がいますし、あるいは山を拝むという人も昔はいました。

ですからああいう山伏さまというのがいますが、山伏とはどういう意味でしょうか。山に伏せるわけです。ですから山伏というのです。そういう山自体に精神があると思うわけです。

それから、自然そのものに精神があるという考えです。それが自然信仰、神道の基本で、自然信仰、御霊信仰、皇祖霊信仰というしっかりとしたものです。そして、天皇が来られるとみんな思わず拝みます。

これはもちろんきちんとした歴史的なことがあって昔は神様なのですけれど、今は人間ということを分かっていても拝むという格好になるのです。それは、天皇、皇后が無私でおられるからです。

無私の存在だということは知っていますし、無私ということは神様なのです。無私というのは自分の利益を考えない、そういう利益を人々から与えられているが故に無私なのです。そういう人々の諒解があるのです。

ですから、天皇というのは単に権力があるからとか、権威があるからといって、みんなそれで事足りるとするのですが、そうではないのです。あの方は無私なのです。ですから、いつもそれを「偽善だ、そんなふりをしているだけだろう」とみんな思うわけですが、とんでもないことで、それはうそなのです。

天皇になられると全部無私になられるのです。これはもう正直なのです。ですから、雅子妃殿下の顔が皇后になった時から変わったでしょう。あんなにニコニコされているというのは、それは自然に無私になられているからです。

そして、実を言うと国民が、天皇の存在というのを日本の中で唯一の無私の存在にさせているし、またなられているわけです。このことの不思議はまた後の機会でお話しますけれど、いずれにしても自然そのものに美があるということを見いだしたのが、日本だけなのです。

この辺も、後で中国の山水画をまた別の機会でお話しますけれど、日本だけの文化というものを中心にして、これから世界の美術、世界の形の歴史を追っていきたいと思います。

そういうことで、今回はこの辺で終わりにしますけれども、いずれにしても、この縄文の時代に立派な縄文土器が出てきたし、それから土偶も優れたものがあるのです。

これは、こういう土偶の中では最高だと言われているのですが、**「縄文のヴィーナス」（10頁参照）**と言われるものです。これは、長野県の茅野市から出てくるわけですけれども、こういうものや、それからハート型土偶とか、優れたものがいくつかあります。

またこの遮光器土偶も、そう言えるかもしれません。これだけの土偶の美しさは、ほかの世界ではないのです。これも美というものを追求する日本人の洗練度というものがあったからです。

民度が高いというのは今だけではなく、昔からあったのです。それは何かと言うと、世界の人、アフリカから出た人がいろいろなところを回って日本に来るということ、そして日本自体が美である

わけです。これは富士山を見れば分かるわけです。それから、必ず高い山に登るとすぐ分かるのです。

いまだに日本に来た外国人は、日本の美が必ず１つの村の中で生きていると見いだすわけです。そういう一部の好きな風景というものをテレビ番組でやっていますけれど、必ずあるのです。それも、美なのです。

ですから、美というものを常に日本人は意識してきたし、今の日本のデザインの一流というのは、やはりみんな美をそこに込めているわけです。

それをやはり今壊そうとしたり、やめようとしたりすることは、絶対にあってはならないし、またそういうことはありえないのです。

それからもっと重要なのは、結局そういう精神というものが、日本になぜできたかということなのです。このことが文化度の高さといえばあれなのですけれども、やはりこれは安定した精神です。

なぜ日本人が安定しているかというと、やはり原罪意識がないということです。こういうような、日本人しか持てない精神力というのがあるので、これについてはおいおいお話したいと思います。

では、今日はここまでにしましょう。どうもありがとうございました。（了）